『神道集』巻八―四十七話「上野群馬郡桃井郷上村内八箇権現事」と船尾山焼失譚

榎本千賀

一　『神道集』「八箇権現事」と「船尾記」

『神道集』巻八―四十七話「上野群馬郡桃井郷上村内八箇権現事」は、これまで先学によって様々な指摘がされてきた。まず、有川美亀男氏は、『神道集』と「船尾記」との詳細な比較を行っている。[1] また、福田晃氏は、『神道集』が『秋の夜の長物語』を仲介として『平家物語』の影響を受けてきたこと、さらには、『神道集』の制作・管理が船尾山麓の念仏聖によるものではないかと指摘している。[2] さらに、松本隆信氏は『神道集』「八箇権現事」は他の本地物語と比べて対象の扱い方が異色であり、作者の関心は船尾寺の縁起興亡を語ることにあったのではないかと述べている。[3] 近藤義雄氏は、「船尾記」の諸本を三つに分類し、諸本の第一類には天台系の、第二類には時宗系の唱導者の力が加えられているのではないかとしている。[4] 以上、これらの論考は、主に『神道集』と、群馬県榛名山の東南麓に伝わる「船尾記」、あるいは「船尾山縁起」との関わりの中で論じられてきた。「船尾記」は「船尾山縁起」の別名にすぎず、どちらも同じ内容だが、今回は、地元でよく使われている「船尾記」の名の方を使用しておく。

これらの研究を踏まえ、今回、「船尾記」の諸本の整理を改めて行い、二十本の「船尾記」を確認することができた。本稿では、「船尾記」の管理者と、「船尾記」を書写した人々について考えていきたい。

まず、『神道集』「八箇権現事」の内容を確認しておく。「八箇権現事」の梗概は、次の通りである。四十八代称徳天皇（在位七六四～七〇）の時、田烈大夫信保は神仏に祈願し、千手の前という娘を授かった。しかし、娘は十八歳の若さで亡くなった。父母らは、伊香保山の東麓にある船尾という崖の下に草庵を建て、千手の前の形見として千手観音を本尊に祀った。その後、円頓房僧正を都から招き、船尾寺と石巌寺を建立した。

五十三代淳和天皇の天長五年（八二八）、上野国の国司左大将家光は、息子の月塞を船尾寺の別当円頓房僧正に差し上げた。ある時、月塞が何者かに誘拐された。悲しみのあまり、月塞の母や乳母らは自害した。都にいた国司は、知らせを受け、伊香保山で死のうと思い、兵を連れて山に登った。ところが、船尾寺では国司が寺を焼き払うためにやってくるとの噂が流れ、国司側と寺僧側の乱戦となった。とうとう船尾寺と石巌寺は猛火に包まれ、焼失した。国司は都に戻り、病死した。その後、月塞は天狗に誘拐されていたことがわかった。国司ら八人の男女は神として現れ、八ケ権現となった。

以上が「八箇権現事」の梗概である。ここでは、前半が田烈一族の

繁栄と船尾寺・石巌寺の建立、後半が国司が船尾寺を焼き払った後に自害するという内容である。

では、次に「船尾記」の内容とは、どのようなものなのかを見ていく。昔、群馬太輔満行が伝教大師に深く帰依し、船尾山に寺院（柳沢寺・楊沢寺）を建立した。この群馬太輔満行が建立した寺院の名が問題で、寺は比叡山に勝るほどの堂塔が立ち並び栄えた。下総の大将千葉常将はこの寺の千手観音に子授けの祈願をした。その結果生まれた相満若の養育を寺に頼むが、相満若は里の祭りに下る途中で何者かに奪われてしまった。常将は寺を恨み船尾山を焼き払ったが、その後、それが天狗の仕業とわかった。これを恥じて常将は自害して果て、常将の妻は船尾山麓に柳沢寺を再興した。

以上、「船尾記」の梗概を掲げたが、この「船尾記」の前半では、群馬太輔満行による寺院の建立が語られている。この寺院が問題となり、「船尾記」の諸本によって「柳沢寺」となったり、「楊沢寺」となったりする。後半では、下総の大将千葉常将による船尾山の焼き払いと、常将の妻による寺院の再興が記されている。なお、船尾山の所在について『神道集』では伊香保山の東麓に船尾という崖があったとしている。しかし、「船尾記」では上州群馬郡に所在するというだけで、どこに船尾山があるのか記されていない。この船尾山という山は実在せず、架空の山であり、寺院の山号にすぎない。では、どこが船尾山といわれているかというと、榛名山の外輪山の一つ水沢山の南麓に、船尾滝が所在する。この船尾滝の南側に寺院が存在したと伝えられており、その寺院の跡が現在でも残っている。

二　柳沢寺の概況

次に、「船尾記」に登場する柳沢寺について触れておく。「船尾記」では、千葉常将の妻は、船尾山焼失後、船尾山麓に「柳沢寺」という寺院を再興している。この再興された柳沢寺こそが、自らの寺だと主張する寺院が、榛名山東麓にある柳沢寺である。そして、後述するが、この柳沢寺が「船尾記」を管理し、「船尾記」を柳沢寺縁起としているのである。

柳沢寺は、榛名山の東麓にある榛東村山子田に所在し、船尾山等覚院と号する天台宗寺院である。本尊は、千手観音であり、観音堂と呼ばれる本堂に安置されている。境内に、千葉常将の妻を祀る思川弁財天、柳沢寺北側に、常将を祭神とする常将神社がある。

当寺は、近世期には比叡山の直末として栄えたが、寛永年間（一六二四～四四）を境に天台宗の関東総本山寛永寺末となった。天明六年（一七八六）「末門書上帳」や、森田孝氏蔵の安政五年（一八五八）「御改人別書上帳」によると、当寺は末寺を長岡村・山子田村（現榛東村）、川原村（現前橋市）に三ケ寺（桃教寺、薬王寺、東光寺）、門徒寺院を新井村（現榛東村）、南下村・北下村・上野田村・陣場村（現吉岡町）、矢原村（現箕郷町）、井出村（現群馬町）に八ケ寺（興徳寺、高唱寺、正慶寺、金剛寺、無量寺、常泉寺、化城寺、法城院）、寺中を四ケ院（吉祥院、常行院、徳性院、西光院）有していた。また、柳沢寺の過去帳「新霊記」によると、檀徒の地域は、山子田村・新井村・広馬場村・長岡村（現榛東村）、金古村（現群馬町）、漆原村・陣場村・北下村・南下村・上野田村・下野田村（現吉岡町）、川原村・池端村（現前橋市）、柏木沢村（現箕郷町）等に及んでいる。近世期、群馬郡には、二百前後の村落があった。しかし、柳沢寺の末寺や檀徒の地域は、群馬郡の二十ケ村にも満たず、榛名山の東南麓という限られた村々に限定されていたことがわかる。そして、後述するが、柳沢寺の末寺や檀徒の地域は、「船尾記」を書写した地域とも重なっているのである。

三　「船尾記」の諸本

次に、「船尾記」の諸本を取り上げる。現在、確認できる「船尾記」

の諸本は、管見の限りでは次の二十本である。

第一類（独鈷山妙見院息災寺、船尾山等覚院楊沢寺＝柳沢寺、榛名山満行大権現）

① 浜名寛氏蔵「上野国群馬郡船尾山物語」
（榛名町白岩。写本一冊。原本明和六年〔一七六九〕。翻刻大島由紀夫『神道縁起物語』二。榛名町歴史民俗資料館寄託）

② 故加藤公一氏蔵「船尾山縁起」→未見
（群馬町大字北原。原本寛政二、三年〔一七九〇、九一〕。寛政十二年〔一八〇〇〕書写）

③ 森田秋氏蔵〔船尾山縁起〕
（榛東村大字山子田。内題「上野国群馬郡桃井之庄山子田村船尾山等覚院柳沢寺縁記」写本一冊。弘化三年〔一八四六〕書写）

④ 大山好弘氏蔵「船尾山縁起」
（群馬町大字引間。内題「上野国群馬郡桃井之庄山子田邑船尾山等覚院柳沢寺縁起」写本一冊。弘化四年〔一八四七〕書写。翻刻『榛東村誌』・『群馬町誌資料編一（古代中世）』）

⑤ 真塩宇一氏蔵「上野国群馬郡船尾山本地記」
（群馬町大字稲荷台。内題「船尾山御本地記」。写本一冊。原本宝暦九年〔一七五九〕。明治三十九年〔一九〇六〕書写。影印大島由紀夫『神道縁起物語』二）

⑥ 柳沢寺蔵「船尾記」
（榛東村大字山子田。写本一冊。昭和七年〔一九三二〕書写）

⑦ 浅見武子氏蔵「船尾記」
（榛東村大字新井。内題「上野国群馬郡桃井庄山子田村船尾山等学院柳沢寺縁起」写本一冊。昭和九年〔一九三四〕書写。高橋好教筆。普及会発行）

⑧ 故狩野利房氏蔵「船尾山等覚院柳沢寺縁記」→未見
（渋川市。翻刻『榛東村誌』・『群馬町誌資料編一（古代中世）』）

第二類（柳沢寺に統一）

⑨ 武藤孝夫氏蔵「船尾山本地由来記」
（吉岡村大字下野田。写本一冊。天明八年〔一七八八〕書写）

⑩ 故加藤公一氏蔵「船尾山本地由来記」→未見
（群馬町大字北原。寛政十三年〔一八〇一〕書写）

⑪ 近藤義雄氏蔵「上野船尾山縁記上」
（群馬町大字金古。内題「船尾山縁記」。写本一冊。天保元年〔一八三〇〕書写。上巻の冒頭・下巻を欠く）

⑫ 岩田喜嗣氏蔵「船尾山記」
（榛東村大字長岡。内題「船尾山記」。写本一冊。天保十二年〔一八四一〕書写。翻刻大島由紀夫『神道縁起物語』二）

⑬ 富沢豊氏蔵〔船尾山縁起〕
（前橋市江田町。写本一冊。天保十三年〔一八四二〕書写。冒頭を欠く）

⑭ 掛川七郎氏蔵「船尾山本地由来記」→未見
（群馬町大字金古。二冊。文久四年〔一八六四〕書写）

⑮ 近藤義雄氏蔵「船尾山縁記」
（群馬町大字金古。写本一冊。原本寛政六年〔一七九四〕。明治二十五年〔一八九二〕書写。冒頭を欠く。翻刻『神道集東洋文庫本』・『榛東村誌』）

⑯ 内山武氏蔵「船尾山記」
（群馬町大字西国分。内題「船尾山記」。写本一冊）

⑰ 荻原三津夫氏蔵「船尾山縁記」→未見
（高崎市高関町。冒頭を欠く）

⑱ 住谷修氏蔵「舟尾山由来記」→未見
（群馬町大字東国分。内題「舟尾山由来」）

⑲ 住谷修氏蔵「船尾山本地由来記」→未見
（群馬町大字東国分）

⑳ 清水作太郎氏蔵「上州船尾山御縁起」

表1　「船尾記」奥書一覧表

分類番号	諸本名	奥書
一類 ①	浜名寛氏蔵「上野国群馬郡船尾山物語」（原本明和六年〔一七六九〕）	明和六丑年五月写之者也 上野国群馬郡白岩村　沙門　慶典慶（ママ） 此本　白岩村　浜名弥之助 上州群馬郡白岩村　浜名林右衛門 浜名徳之助借之
②	故加藤公一氏蔵「船尾山縁起」（寛政一二年〔一八〇〇〕）	源（ママ）本寛政二、三年之頃書写申所幼少ニシテ写新調ス 寛政十二歳弥生末諸冊ト同様ニ相極者也　大屋敷村　大山　定治郎
③	森田秋氏蔵〔船尾山縁起〕（弘化三年〔一八四六〕）	弘化三丙午六月吉日　柳澤寺より借受書写し 此本持主　上野国群馬郡桃井領山子田村新保曲輪　森田酉之丞
④	大山好弘氏蔵「船尾山縁起」（弘化四年〔一八四七〕）	此書ハ山子田村柳沢寺什物を其儘書写申候、併本書ハ真片仮名にて有之候を是にハ讀易き様に俗字ニ書崩申候卒 是辰弘化四丁未正月大吉祥日　長岡村神薬師　岩田　勝蔵　所持
⑤	真塩宇一氏蔵「上野国群馬郡船尾山本地記」（明治三九年〔一九〇六〕）	宝暦九乙卯臘月 明治参拾九年丙午春弥生応（ママ）于　山田　宇右衛門原写書 真塩萬之助需復写之
⑥	柳沢寺蔵「船尾記」（昭和七年〔一九三二〕）	昭和七年神無月吉祥日 ※表紙に「船尾山第四拾六世晃徹代」
⑦	浅見武子氏蔵「船尾記」（昭和九年〔一九三四〕）	昭和九年三月廿五日（非売品）　群馬郡桃井郵　筆者　高橋　好教（印） 発行所　普及舎
⑧	故狩野利房氏蔵「船尾山等覚院柳沢寺縁記」	な　し
二類 ⑨	武藤孝夫氏蔵「船尾山本地由来記」（天明八年〔一七八八〕）	天明八年申清日　上野国群馬郡野田之住　武藤　信房
⑩	故加藤公一氏蔵「船尾山本地由来記」（寛政一三年〔一八〇一〕）	寛政十三辛酉正月写之　上野国群馬郡内藤宿新田　小峯　藤五郎

⑪	近藤義雄氏蔵「上野船尾山縁記上」 （天保元年〔一八三〇〕）	天保元年 斎主　源へ衛也（印）（印）	
⑫	岩田喜嗣氏蔵「船尾山記」 （天保一二年〔一八四一〕）	天保十二辛丑八月吉日　持主　岩田　茂兵衛 ※冒頭に「上野国群馬郡桃井之庄山子田村船尾山柳沢寺本寺之曰ク」	
⑬	富沢豊氏蔵〔船尾山縁起〕 （天保一三年〔一八四二〕）	天保十三年壬寅二月写之　上野国群馬郡江田村　冨沢　孝四郎	
⑭	掛川七郎氏蔵「船尾山本地由来記」 （文久四年〔一八六四〕）	文久四甲子年二月中旬書写　青梨子村　関根　角次郎	
⑮	近藤義雄氏蔵「船尾山縁記」 （明治二五年〔一八九二〕）	寛政六甲寅年三月 明治廿五年壬辰二月日　一倉　幸吉殿　写之 持主　加藤　金治郎 六拾七才写之	
⑯	内山武氏蔵「船尾山記」	な　し	
⑰	荻原三津夫氏蔵「船尾山縁記」	抑十一面観世音由来ハ群馬太夫満行御鏡白山江奉納ス是十一面観世音也長岡神薬師北観世音方向 白山是今世迄有焉 長岡　高井　三輪　小倉　国分　渋川　元惣社　小倉　大林　伸蔵 応永書焉 群馬太夫之書物諸事　性家　彦五良 柳沢寺開（ママ）　真下　玄番 上野国群馬郡長岡村　星野　三郎右衛門	
⑱	住谷修氏蔵「舟尾山由来記」	な　し	
⑲	住谷修氏蔵「船尾山本地由来記」	な　し	
⑳	清水作太郎氏蔵「上州船尾山御縁起」	な　し	

（榛名町宮沢。内題「上野国船尾山御縁起」。写本一冊。榛名町歴史民俗資料館寄託。冒頭を欠く）

この二十本のうちで、「未見」とあるのは、所蔵者が代わる等して、どうしても実際に見ることができなかったものである。それで、未見とあるものについては、近藤義雄氏がそれぞれの伝本を筆写したものをお借りした。また、福田晃氏によると、この二十本以外に

㉑ 小山房吉氏蔵「船尾記」（原本弘化三年〔一八四六〕。昭和九年〔一九三四〕）

㉒ 小山宏氏蔵「船尾山等額院縁起」（天保八年〔一八三七〕）

が存在するようであるが、[5] 未見のため、本稿では取り上げない。

さて、これら「船尾記」の諸本は、榛名山の東南麓の村落で書写されている。その内容は、柳沢寺の前身としての船尾山の焼失が述べられており、前述のように、近藤義雄氏によって第一類から第三類まで分類されてきた。[6] しかし、本稿では、柳沢寺を含めた寺社縁起にあたる第三類を「船尾記」の分類からはずした。それは、第一類と第二類は同一のストーリー展開をしているのに対して、第三類は船尾山の焼失を寺社縁起として利用しているにすぎず、第一類・第二類の「船尾記」と、寺社縁起とを同一には扱えないからである。

ところで、この「船尾記」の管理者が柳沢寺であったのである。たとえば、諸本の一覧の中で第一類の③森田秋氏蔵本、④大山好弘氏蔵本、第二類の⑫岩田喜嗣氏蔵本は、冒頭や奥書によると、柳沢寺で所蔵していた「船尾記」を借り受け、書写した伝本である。〔表1〕によると、③森田秋氏蔵本の奥書には、「柳沢寺より借受書写し」、④大山好弘氏蔵本の奥書には、「此書ハ山子田村柳沢寺什物を其儘写申候、併本書ハ真片仮名にて有之候を是にハ読易き様に俗字ニ書崩申候卒」、⑫岩田喜嗣氏蔵本の冒頭には、「上野国群馬郡桃井之庄山子田村船尾山柳沢寺本寺之曰ク」と記されており、これら三本が、柳沢寺本を転写したのは明らかである。なお、④大山好弘氏蔵本は、榛東村長岡の岩田家から、渋川市有馬の山崎家へ、次いで群馬町引間の大山家へ譲られた伝本である。この榛東村長岡の岩田家は、⑫岩田喜嗣家の親戚にあたる。つまり、同じ岩田一族で柳沢寺から「船尾記」を借り受けているのである。

さて、この③④⑫の伝本の中で特に注目されるのが、④大山好弘氏蔵本である。④大山好弘氏蔵本は、前述したように、〔表1〕奥書一覧表によると、柳沢寺から借りた写本は真片仮名、つまり漢字に片仮名を交ぜた書き方であった。それを読みやすいように、漢字平仮名交じりの文に変えたと記しているのである。また、柳沢寺の原本がそうだったのかもしれないが、④大山好弘氏蔵本の漢字には振り仮名が付いている。同様のことは、③森田秋氏蔵本についてもいうことができる。③森田秋氏蔵本は、④大山好弘氏蔵本と同じ第一類の伝本であり、書写された時期も一年しか変わらない。つまり、③森田秋氏蔵本と④大山好弘氏蔵本は、同じ伝本を柳沢寺から借り受けた可能性が高いといえよう。そして、③森田秋氏蔵本も、④大山好弘氏蔵本と同様、漢字平仮名交じりの文であり、振り仮名が多用されているのである。この真片仮名から漢字平仮名交じりの文に変更した意味は何であろうか。これは、常に柳沢寺という寺院を中心としていた「船尾記」が、一般に供するために変えられたと捕らえることができるのではないだろうか。

以上のことを、〔表2〕「船尾記」の諸本の系統と伝存状況で確認しておく。後述するが、柳沢寺は、現在、「船尾記」とは別に三本の縁起を所蔵している。この三本のうち、特に注目すべきは、寛政五年（一七九三）に作成された「船尾山記並引」である。この「船尾山記並引」は、「船尾記」の第一類と二類の校合を行っている。たとえば、〔表3〕によると、寺院の建立年と焼失年を、「船尾記」の第一類では、それぞれ宝亀七年（七七六）と承和六年（八三九）、第二類では、それぞれ前者を弘仁九年（八一八）、後者を長元四年（一〇三一）か貞元（九七六〜八）と記している。これら第一類と二類で異なる年次を、「船尾山記並引」では、併記しているのである。このことは、「船尾山

表2　「船尾記」の諸本の系統と伝存状況

年次	「船尾記」第一類	「船尾記」第二類	柳沢寺縁起
天明八（一七八八）		武藤孝夫氏蔵「船尾山本地由来記」	
寛政五（一七九三）	柳沢寺旧蔵一類本	柳沢寺旧蔵二類本	柳沢寺蔵「船尾山記並引」
寛政一二（一八〇〇）	故加藤公一氏蔵「船尾山縁起」	故加藤公一氏蔵「船尾山本地由来記」	
寛政一三（一八〇一）	浜名寛氏蔵「上野国群馬郡船尾山物語」	近藤義雄氏蔵「上野船尾山縁記上」	柳沢寺蔵「船尾山柳沢寺所伝ノ縁起」
文化頃か（一八〇四）		岩田喜嗣氏蔵「船尾山記」	柳沢寺蔵「船尾山等覚院柳沢寺境内思河大吉祥弁財功徳天女略縁記」
天保元（一八三〇）	森田秋氏蔵〔船尾山縁起〕	富沢豊氏蔵〔船尾山縁起〕	
天保二（一八三一）	大山好弘氏蔵「船尾山縁起」		
天保七（一八三六）	故狩野利房氏蔵「船尾山等覚院柳沢寺縁記」	掛川七郎氏蔵「船尾山本地由来記」	
天保一二（一八四一）		内山武氏蔵「船尾山記」	
天保一三（一八四二）		近藤義雄氏蔵「船尾山縁記」	
弘化三（一八四六）	真塩宇一氏蔵「上野国群馬郡船尾山本地記」		
弘化四（一八四七）	柳沢寺蔵「船尾記」		
文久四（一八六四）		清水作太郎氏蔵「上州船尾山御縁起」	
近世後期か	浅見武子氏蔵「船尾記」	荻原三津夫氏蔵「船尾山縁記」	
明治二五（一八九二）		住谷修氏蔵「舟尾山由来記」	
明治三九（一九〇六）		住谷修氏蔵「船尾山本地由来記」	
昭和七（一九三二）			
昭和九（一九三四）			
年次未詳			
年次未詳			
年次未詳			
年次未詳			

表3　「八箇権現事」比較表1

類号分番	古本系統	流布本系統	流布本系統	一類①	一類②
諸本名	『神道集』赤木文庫本	『神道集』東洋文庫本	『神道集』河野本	浜名寛氏蔵「上野国群馬郡船尾山物語」（原本明和六年〔一七六九〕）	故加藤公一氏蔵「船尾山縁起」（寛政一二年〔一八〇〇〕）
船尾山の開基	群馬郡ノ内桃井ノ郷田烈（ツラ）ノ太夫信保	群馬ノ郡内桃井郷田烈大夫信保	群馬ノ郡内桃井ノ郷田烈大夫信保	八ケ国の大将・副将軍群馬の太輔満（ミツ）行	八ケ国の大将・副将軍群馬の大輔満行
開基の娘	千手御前（千手ノ姫）	千手ノ姫	千手ノ前（千手ノ姫）	なし	なし
開基の娘婿	田烈ノ藤次家保（ヤス）	田烈藤次家保	田烈ノ藤次家保	なし	なし
最初の建立寺院	なし	なし	なし	独鈷（トッコ）山妙見院息災（ソクサイ）寺	独鈷（コ）山妙見院息災（ソクサイ）寺
寺院建立年	称徳天王（ママ）（七六四～七〇）	称徳天皇	称徳天皇	宝亀七年（七七六）	宝亀七年
寺院名	船尾山石巌寺（別当寺）	船尾山石巌寺（別当寺）	船尾山石巌寺（別当寺）	船尾山東学院楊沢寺	船尾山等覚院楊沢寺
寺院焼失・再興年	天長五年（八二八）	天長五年	天長五年	承和六年（八三九）	承和六年
寺院焼失者	上野国々司桃苑ノ左大将家光	上野国々司桃苑ノ左大将家光	上野国ノ国司桃苑左大将家光	常陸国の大将桓武（クワンム）天皇九代の後胤（コウイン）千葉之次郎忠常の御子息千葉左衛門常将	常陸国の大将桓武天皇九代の後胤千葉の次郎忠常の御子息千葉ノ左衛門常将
焼失者の息子	月寒殿	月塞（ママ）殿	月寒（ママ）殿	相満殿（アイミツ）・相満若	相満若
寺院再興者	なし	なし	なし	常将の妻・仲光再興	常将の妻・仲光再興
地名由来	車立戸黒部坂徳戸ノ窪相満カ嶽	車立戸黒部坂徳戸窪相満嶽	車立戸黒部坂徳戸窪相満カ嶽	自害沢比丘尼沢思ひ河引間の里塚田の里相満の嶽	自害沢比丘尼沢思河引間の里塚田の里相満嶽

一類③	一類④	一類⑤	一類⑥
森田秋氏蔵〔船尾山縁起〕（弘化三年〔一八四六〕）	大山好弘氏蔵「上野国群馬郡桃井之庄山子田邑船尾山等覚院柳沢寺縁起」（弘化四年〔一八四七〕）	真塩宇一氏蔵「上野国群馬郡船尾山本地記」（明治三九年〔一九〇六〕）	柳沢寺蔵「船尾記」（昭和七年〔一九三二〕）
八ケ国の大将副将軍群馬太輔満行	八ケ国の大将群馬大輔満行	八ケ国の大将・副将軍群馬の大輔満行	八ケ国の大将・副将軍群馬太輔満行
なし	なし	なし	なし
なし	なし	なし	なし
独鈷山妙見院息災寺	独鈷山妙見院息災寺	独鈷山妙見院息災寺	独鈷山妙見院息災寺
宝亀七年	宝亀七年	宝亀七年	宝亀七年
船尾山東学院楊沢寺	船尾山等覚院楊沢寺	船尾山東覚院楊沢寺	船尾山等覚院楊沢寺
承和六年	長和六年（一〇一七）	承和六年	承和六年
常陸国の大将桓武天皇九代の後胤千葉次郎忠常の御子息千葉左衛門常将	下総国の大将桓武天皇九代の後胤千葉の次郎忠常の御子息千葉の左衛門常将	常陸国の大将桓武天皇九代の後胤千葉次郎忠常の御子息千葉ノ左衛門常将	常陸国の大将桓武天皇九代の後胤千葉次郎忠常の御子息千葉左衛門常将
相満	相満若	相馬殿（相満若）	相満殿
常将の妻・仲光再興	常将の妻・仲光再興	常将の妻・仲光再興	常将の妻・仲光再興
自害沢 比丘尼沢 思河 引間の里 塚田の里 相満嶽 釜屋 舞台 台門〔ママ〕	自害沢 比丘尼沢 思河 引間の里 塚田の里 相馬ケ嶽 釜屋 舞台 大門	自害沢 比丘尼沢 思ひ川 引間の里 塚田の里 相満ケ嶽	自害沢 比丘尼沢 思川 引間の里 塚田の里 相満嶽

一類⑦	一類⑧	二類⑨	二類⑩	二類⑪
浅見武子氏蔵「船尾記」（昭和九年〔一九三四〕）	故狩野利房氏蔵「船尾山等覚院柳沢寺縁記」	武藤孝夫氏蔵「船尾山本地由来記」（天明八年〔一七八八〕）	故加藤公一氏蔵「船尾山本地由来記」（寛政一三年〔一八〇一〕）	近藤義雄氏蔵「上野船尾山縁記上」（天保元年〔一八三〇〕）
八ケ国の大将・副将軍群馬大輔満行	八ケ国の大将・副将軍群馬太夫満行	上野住人関八州の大将群馬太夫満行	上野国の住人関東八ケ国の大将群馬ノ太夫光行（ママ）	上野国之住人関東八ケ国の大将群馬之太夫満行
なし	なし	なし	なし	なし
なし	なし	なし	なし	なし
独鈷山妙見院息災（ドッコ ソクサイ）寺	独古山妙見院息災寺	なし	なし	なし
宝亀七年	宝亀七年	弘仁九年（八一八）	弘仁九年	光仁（ママ）九年
船尾山等学院楊沢寺	船尾山等覚院楊沢寺	船尾山東学院花蔵坊柳沢寺	船尾山東覚院柳沢寺	船尾山等覚院柳沢寺
承和六年	承和六年長和年中	貞元年来（九七六～八）	なし	なし
常陸国の大将桓武天皇九代の後胤（コウイン）千葉次郎忠常の御子息千葉左衛門常将	下総国の大将桓武天皇九代の後胤千葉次郎忠常の御嫡子千葉左衛門常将	下総国の住人桓武天王九代の御胤千葉左衛門常政	下総の国の住人桓武天皇九代の御胤千葉忠常の御子息千葉左衛門常政	常政
相満殿	相満丸	相満若	相馬君（相満殿）	相満（相満若）
常将の妻・仲光再興	常将の妻・仲光再興	常政の妻・中光再興	常政の妻・中光再興	なし
自害沢 比丘尼沢 思河 引間の里 塚田の里 相満嶽	自害沢 比丘尼沢 思川 引間の里 塚田の里 相馬嶽 舞台 釜屋	じがい沢 びくに沢 思ひ川 相満嶽	引間の里 自害沢 比丘尼沢 思ひ川 相満ケ嶽	なし

二類⑫	岩田喜嗣氏蔵「船尾山記」（天保一二年（一八四一））	関東八ケ国大将群馬太輔満行	なし	なし	なし	弘仁九年	船尾山等覚院柳沢寺	長元年来（一〇二八～三七）	下総国の住人桓武天皇九代の後胤千葉治郎忠常の御子息千葉左衛門常政	相満若	常政の妻・中光再興	自害沢 比丘尼沢 思川 相満が嶽
二類⑬	富沢豊氏蔵（船尾山縁起）（天保一三年（一八四二））	上野住人関八州の大将群馬太夫満行	なし	なし	なし	弘仁九年	船尾山東学院花蔵坊柳沢寺	貞元年来	千葉左衛門常政	相満若（相満殿）	常政の妻・仲光再興	じがひ沢 ひくに沢 思ひ川 相満嶽
二類⑭	掛川七郎氏蔵「船尾山本地由来記」（文久四年（一八六四））	上野ノ住人関八州の大将群馬ノ太夫満行	なし	なし	なし	弘仁九年	船尾山東学院花蔵坊柳沢寺	貞元年来	下総の国の住人桓武天皇九代の御胤千葉次郎忠常の御子息千葉左衛門常政	相馬若（相満殿）	常政の妻・仲光再興	じがひ沢 比丘尼沢 思ひ川 相満嶽
二類⑮	近藤義雄氏蔵「船尾山縁記」（明治二五年（一八九二））	上野国住人関東八ケ国の大将群馬太夫満行	なし	なし	なし	弘仁九年	船尾山等覚院柳沢寺	長元年来	下総国の住人くわんむ天皇九代のかうゐん千葉の左衛門常政	相満（相満右）	常政の妻・中光再興	じがい沢 びくに沢 思ひ河 相満がたけ
二類⑯	内山武氏蔵「船尾山記」	上野住人関東八ケ国之大主群馬太夫光行（ママ）	なし	なし	なし	弘仁九年	船尾山龍沢寺（ママ）船尾山東覚院柳沢寺	長元年来	下総国之住人桓武天皇之御胤知（ママ）羽次郎旦（ママ）恒之子同苗左衛門常政	相満若	常政の妻・中光再興	じがひ沢 びくに沢 思ひ河
二類⑰	荻原三津夫氏蔵「船尾山縁記」	上野国の住人関東箇（ケ）の大主群馬太夫満行	なし	なし	なし	光仁（ママ）九年	船尾山等覚院柳沢寺	長元年来	下総国住人くわんむ天皇九代後いん千葉左衛門常政	相満	常政の妻・中光再興	ちがい沢 びくに沢 思ひ川 相満が嶽
二類⑱	住谷修氏蔵「舟尾山由来記」	上野国住人関東八ケ国の大将群馬太夫満行	なし	なし	なし	かうにん九年	舟尾山等覚院柳沢寺	長元四年（一〇三一）	下総ノ国の住人くわんむ天皇九代のこういん千葉の左衛門常政	相満若	常政の妻・中光再興	死（ママ）かい沢 ひくに沢 おもひ川 相満が嶽

二類⑲	二類⑳	参考	参考	参考	参考
住谷修氏蔵「船尾山本地由来記」	清水作太郎氏蔵「上州船尾山御縁起」	柳沢寺蔵「船尾山記並引」（寛政五年〔一七九三〕）	柳沢寺蔵「船尾山柳沢寺所伝ノ縁起」（天保二年〔一八三一〕）	柳沢寺蔵「船尾山等覚院柳沢寺境内思河大吉祥弁財功徳天女略縁記」（天保七年〔一八三六〕）	宮昌寺蔵「宮昌護国禅寺記」（明治一八年〔一八八五〕）
上野ノ住人関八州の大将群馬太夫満行	上野国之住人関東八ケ国之大将群馬太夫光行（マヽ）	副将軍満行	副将軍満行	なし	国府群馬大輔満行
なし	なし	なし	なし	なし	なし
なし	なし	なし	なし	なし	なし
なし	なし	妙見院息災寺（引間村妙見寺）	独鈷山息災院妙見	なし	なし
弘仁九年	かう仁九年	宝亀七年弘仁七年	弘仁七年	なし	なし
船尾山東覚院花蔵坊柳沢寺	船尾山東覚院柳沢（リヤウタク）寺	楊沢寺	楊沢寺	船尾山等覚院柳沢寺	船尾山東学院楊沢寺
貞元年来	長今年来	承和の頃長和の頃	長和年間	長和年中	養和中（一一八一～八二）
下総国の住人桓武天皇九代の御胤千葉次郎忠常の御子息千葉左衛門常政	常政	下総権介忠常之子千葉佐右衛門常将	下総ノ権ノ守忠常ノ子千葉ノ佐右衛門常将	下総の国の大守千葉左衛門尉平常将朝臣	千葉次良忠常ノ嫡男千葉左衛門常将
相馬君（相馬殿）	相光若	相満	相満	相満王丸	相満若
常政の妻・中光再興	常政の妻・中光再興	常将の妻・僧再興	兵・僧侶再興	常将の妻再興	なし
じがひ沢びく尼沢思川相馬嶽	自害沢びくに沢思ひ川	山王之祠自害沢大悲閣天女池	大悲天女池	相満杉相満ケ嶽	真珠山医王寺

記並引」が成立した寛政五年（一七九三）には、既に柳沢寺が、「船尾記」の第一類と二類を所蔵していた可能性があるといえよう。そして、柳沢寺所蔵の「船尾記」を、③森田家や④大山家、⑫岩田家に貸し出しているのである。また、⑧故狩野利房氏蔵本の本文は、③森田家や④大山家の本文と非常に似ている。このことは、⑧故狩野家本も柳沢寺の管理下にあったかとも推測できる。現在、柳沢寺には、近世期の「船尾記」は現存しない。そのため、柳沢寺では、昭和七年（一九三二）に③森田家の「船尾記」を借り受け、書写したと伝えている。

ところで、「船尾記」の第一類と第二類を比較していくと、柳沢寺が「船尾記」に関与することにより、「船尾記」が次第に変質していった事実を見てとることができる。それは、第一類の群馬太輔満行が建立した寺院の名に現れている。〔表3〕によると、第一類では、満行は、最初に息災寺を建立し、その後、楊沢寺を建てているのである。この楊沢寺は千葉常将によって焼失させられるが、その後、再興されたのが柳沢寺なのである。しかし、第二類では、満行は柳沢寺しか建立しない。そして、再興された寺院の名も柳沢寺なのである。つまり第二類では、建立・再興される寺院は柳沢寺に限定されているのである。

さらに、〔表4〕によると、「船尾記」第一類では、満行は榛名山満行大権現として現れており、榛名山との関わりが強調されている。それに対して、第二類では、満行が神として現れることはない。つまり、「船尾記」は柳沢寺が介在することにより、寺院名がすべて柳沢寺に統一され、柳沢寺の存在のみがクローズアップされてくるのである。このように見てくると、柳沢寺が、「船尾記」のもとからの管理者ではなかったのかもしれないが、ある時期、柳沢寺が「船尾記」の管理を一手に引き受けたのではないかといえよう。

ところが、それとは別に、榛名町にある南泉坊が「船尾記」を持ち伝えてきた。「船尾記」諸本の一覧の中の①浜名家は、近世には南泉坊を名乗る本山派の修験であり、白岩山長谷寺観音堂の塔頭の一つであった。南泉坊は、「船尾記」を白岩山の縁起とはしていないが、南泉坊の伝本は、「船尾記」が柳沢寺に取り込まれる以前の縁起の存在を示すものといえよう。

ところで、「船尾記」の中には、明らかに、転写を繰り返した伝本がある。その伝本とは、①浜名寛氏蔵本、②故加藤公一氏蔵本、⑤真塩宇一氏蔵本、⑮近藤義雄氏蔵本、⑰荻原三津夫氏蔵本の五本である。これらの伝本は、〔表1〕奥書一覧表によると、何度も書写され、子孫が写しなおしたり、あるいは、同族ではない他人から借りて写したりしている。このことは、人々の間で、「船尾記」を借りることが日常的に行われていたことを示しているといえよう。

四　船尾山焼失譚と寺社縁起

船尾山焼失譚は、榛名山東南麓の寺社によって縁起として取り入れられてきた。その寺社は、次の通りである。

柳沢寺

① 柳沢寺蔵「船尾山記並引」
（榛東村大字山子田。写本一巻。寛政五年〔一七九三〕書写）

② 柳沢寺蔵「船尾山柳沢寺所伝ノ縁起」
（榛東村大字山子田。写本一巻。原本天正二年〔一五七四〕。天保二年〔一八三一〕書写。翻刻『榛東村誌』）

③ 柳沢寺蔵「船尾山等覚院柳沢寺境内思河大吉祥弁財功徳天女略縁記」
（榛東村大字山子田。写本一冊。天保七年〔一八三六〕書写。翻刻『榛東村誌』）

宮昌寺

④ 宮昌寺蔵「宮昌護国禅寺記」→未見
（榛東村大字広馬場。写本一冊。明治十八年〔一八八五〕書写。翻刻『榛東村誌』）

表4　「八箇権現事」比較表2

古本系統	流布本系統	流布本系統	一類①	一類②	一類③
『神道集』赤木文庫本	『神道集』東洋文庫本	『神道集』河野本	浜名寛氏蔵「上野国群馬郡船尾山物語」（原本明和六年〔一七六九〕）	故加藤公一氏蔵「船尾山縁起」（寛政一二年〔一八〇〇〕）	森田秋氏蔵〔船尾山縁起〕（弘化三年〔一八四六〕）
上野国々司桃苑ノ左大将家光	上野国々司桃苑ノ左大将家光	上野国ノ国司桃苑左大将家光	千葉左衛門常将（船尾山の惣鎮守・常将宮）	千葉左衛門常将（船尾山の惣鎮守・常将明神）	千葉左衛門常将（船尾山の惣鎮守・常将明神）
母御前	母御台	母御台	御台所（思ひ川の主・弁才天女）	御台所（思川の主・弁財天女）	御台所（思河の主・弁財天女）
月塞殿	月塞キ殿	月寒（ママ）殿	相満若（里髪山・相満の嶽）	相満若（里髪山・相満嶽）	相満（里髪山・相満嶽）
御乳母ノ黒部局	乳母ノ黒部御局	御乳母ノ黒部御局	仲光（山の神）	仲光（山神）	仲光（山の神）
御守ノ徳戸ノ前	御守ノ徳戸ノ前	御守ノ徳戸ノ前へ	座主（勢至菩薩）	座主（勢至菩薩）	座主（勢至菩薩）
御後見ノ宮内ノ判官相満	御後見宮内判官相満	御後ロ見ノ宮内判官相満	法師（千聖馬面如意順体、九曜菩薩、普賢菩薩、十二菩薩、熊井堂の権現、八箇権現、十二社権現、七社の明神、六社の明神、神明夜叉明神）	法師（千聖馬面如意巡体、九曜之菩薩、普賢菩薩、十二菩薩、熊井堂の権現、八ケ権現、十二社権現、七社明神、六社明神、神明夜叉明神）	法師（千聖馬面如意順体、九曜菩薩、普賢菩薩、十二菩薩、熊井堂の権現、八箇の権現、十二社権現、七社明神、六社明神、神明夜叉明神）
御友菊王丸	御供菊王丸	御友菊王丸	群馬の太輔満行（大権現）	群馬の大輔満行（満行大権現）	群馬の大輔満行（榛名山満行大権現）

一類④	一類⑤	一類⑥	一類⑦	一類⑧
大山好弘氏蔵「船尾山縁起」（弘化四年〔一八四七〕）	真塩宇一氏蔵「上野国群馬郡船尾山本地記」（明治三九年〔一九〇六〕）	柳沢寺蔵「船尾記」（昭和七年〔一九三二〕）	浅見武子氏蔵「船尾記」（昭和九年〔一九三四〕）	故狩野利房氏蔵「船尾山等覚院柳沢寺縁記」
千葉の左衛門常将（船尾山の総鎮守・常将明神）	千葉の左衛門常将（船尾山の総鎮守・常将明神）	千葉の左衛門常将（船尾山の総鎮守・常将明神）	千葉左衛門常将公（船尾山の惣鎮守・常将大神）	千葉左衛門常将公（船尾山〔山子田村〕の総鎮守・常将明神）
御台所（思河の主・弁財天女）	御台所（思ひ川の主・弁財天女）	御台所（思川の主・弁財天女）	御台所（思河の主・弁財天女）	御台所（思川の主・弁財天女）
相満（里髪山・相馬ケ嶽）	相満殿（里髪山・相満ケ嶽）	相満若（里髪山・相満嶽）	相満若（里髪山・相満嶽）	相満君（里髪山・相馬嶽）
仲光（山の神）	仲光（山の神）	仲光（山の神）	仲光（山の神）	仲光（山の神）
座主（勢至菩薩）	座主（勢至菩薩）	座主（勢至菩薩）	座主（勢至菩薩）	座主（勢至菩薩）
法師（千聖馬面如意順体、九曜菩薩、普賢菩薩、十二菩薩、熊井堂の権現、八箇の権現、十二社権現、七社の明神、六社の明神、神明夜叉明神）	法師（千手観世音馬頭十一面如意輪准□熊井堂権現、十二社権現、七社の明神、六社の明神、夜叉明神）	法師（千聖馬面如意順体、熊井堂の権現八箇の権現、十二社の権現、七社の明神、六社の明神、神明夜叉明神）	法師（千聖馬面如意順体、九曜菩薩、普賢菩薩、十二菩薩、熊井堂の権現、八箇の権現、十二社権現、七社明神、六社の明神、神明夜叉明神）	法師（千聖馬面如意順体、九曜普賢菩薩、十二菩薩、熊井堂の権現、八箇の権現、十二社権現、七社権現、六社の明神、神明夜叉明神）
群馬の大輔満行（榛名山満行大権現）	群馬大輔満行（榛名山満行大権現）	群馬の大輔満行（満行宮大権現）	群馬大輔満行（榛名山満行大権現）	群馬の太夫満行（榛名山満行権現）

二類⑨	武藤孝夫氏蔵「船尾山本地由来記」（天明八年〔一七八八〕）	千葉左衛門常政殿（舟尾山の惣鎮守・常の宮・こまきの跡）	御台所（思川弁財天）	相満殿（里髪山・相満嶽）	中光（山神）		
二類⑩	故加藤公一氏蔵「船尾山本地由来記」（寛政一三年〔一八〇一〕）	千葉左衛門常政殿（船尾山の惣鎮守・常将宮・駒木の跡）	御台所（思ひ川弁財天）	相満殿（里髪山・相満ケ嶽）	仲光（山の神）		
二類⑪	近藤義雄氏蔵「上野船尾山縁記上」（天保元年〔一八三〇〕）	な し	な し	な し	な し		
二類⑫	岩田喜嗣氏蔵「船尾山記」（天保一二年〔一八四一〕）	千葉左衛門常政殿（船尾山の鎮守・常政宮・こまきの跡）	御台所（思川の弁才天）	相満若（くろ神山・相満が嶽）	中光（山の神）		
二類⑬	富沢豊氏蔵〔船尾山縁起〕（天保一三年〔一八四二〕）	常政殿（舟尾山の惣鎮守・常ノ宮・こまきの跡）	御台所（思川弁財天）	相満殿（里髪山・相満嶽）	仲光（山神）		
二類⑭	掛川七郎氏蔵「船尾山本地由来記」（文久四年〔一八六四〕）	千葉左衛門常政殿（船尾山の惣鎮守・常が宮・駒木の跡）	御台所（鬼川弁財天）	相満殿（里髪山・相満嶽）	仲光（山神）		
二類⑮	近藤義雄氏蔵「船尾山縁記」（明治二五年〔一八九二〕）	千葉の左衛門常政殿（船尾山のちん守・常の宮・つゝこまき跡）	御代処（思ひ川の弁財天）	相光（ママ）殿（里神山・相満がたけ）	中光（山神）		
二類⑯	内山武氏蔵「船尾山記」	常政殿（常之宮大明神・駒木郡）	御台所（薬師如来）	な し	中光・女郎立（ママ）（仏体）		

妙見社・寺（群馬町大字引間）

⑤ 大山好弘氏蔵「萩花園星神記」→未見（群馬町大字引間。翻刻『群馬県史料集』八巻）

⑥ 国府郷土誌蔵「萩花園星神記」→未見（明治三年〔一八七〇〕。翻刻『群馬県史料集』八巻）

⑦ 大山好弘氏蔵「花園星神記」（群馬町大字引間。写本一冊。明治十四年〔一八八一〕書写）

滝沢寺（箕郷町大字白川）

⑧ 内山武氏蔵「上野国群馬郡大嶽山縁起」（群馬郡大字西国分。写本一冊）

まず、柳沢寺の縁起は、近世の地誌類に盛んに取り上げられてきた。例えば、安永三年（一七七四）頃成立の『上野志』下巻と、文政二年（一八一九）頃成立の『上毛国風土記』第七群馬郡には、「三十石（ママ） 山小田舟尾山柳沢寺天台宗 当寺縁起あり」と記され、柳沢寺に縁起が存在したことを知りうるのである。また、②「船尾山柳沢寺所伝ノ縁起」の奥書には、

于時天正二甲戌年三月吉日
右当寺古縁起一巻不知作者名、蓋前住大徳依古老口碑而編選者年代属久遠虫食剝落文字頻不可読焉、今新繕写以充常什云唯願、本尊大悲薩埵開山大師其證之異
天保二年辛卯十月二日
柳沢寺三十三世薫席法印慈芳弟子

二類⑰	荻原三津夫氏蔵「船尾山縁記」	千葉左衛門常政殿（船尾山鎮守・常宮明神）	御台所（思ひ弁財天）	相満殿（里髪山・相満が嶽）	中光（山の神）		
二類⑱	住谷修氏蔵「舟尾山由来記」	千葉の左衛門常政との（舟尾山のちん守・常の宮）	御代所（おもひ川の弁天）	相満との（里神山・相満が嶽）	中光（山神）		
二類⑲	住谷修氏蔵「船尾山本地由来記」	千葉の左衛門常政殿（舟尾山の惣鎮守・常の宮・駒木の跡）	御台所（思川弁天）	相馬殿（里髪山・相馬嶽）	仲光（山神）		
二類⑳	清水作太郎氏蔵「上州船尾山御縁起」	常（恒）政殿（船尾山惣鎮守・恒政の宮・正一位常政大明神）	な し	な し	な し	な し	な し
参考	柳沢寺蔵「船尾山記並引」（寛政五年〔一七九三〕）	な し	な し	な し	な し	な し	な し
参考	柳沢寺蔵「船尾山柳沢寺所伝ノ縁起」（天保二年〔一八三一〕）	な し	な し	な し	な し	な し	な し
参考	柳沢寺蔵「船尾山等覚院柳沢寺境内思河大吉祥弁財功徳天女略縁記」（天保七年〔一八三六〕）	千葉左衛門尉平常将朝臣（正一位常将大明神・毘沙門天王）	千葉左衛門尉平常将朝臣の内室（思河・大吉祥弁財功徳天女如意輪観自在菩薩）	相満王丸（相満ケ嶽）	な し	な し	な し
参考	宮昌寺蔵「宮昌護国禅寺記」（明治一八年〔一八八五〕）	な し	な し	な し	な し	な し	な し

三十四世嗣法比丘阿闍梨貫雄撰

とあり、この縁起は天正二年（一五七四）の古縁起を原本とし、虫食いや剝落のため文字が読みにくくなったので、天保二年（一八三一）の三十四世貫雄の時に写しなおしたと記されている。先述したように、地誌類によると、安永（一七七二～八一）頃には、柳沢寺の縁起が既にできあがっているわけだが、このことが柳沢寺の所蔵縁起である「船尾山柳沢寺所伝ノ縁起」によっても確認できるのである。

さらに、③「船尾山等覚院柳沢寺境内思河大吉祥弁財功徳天女略縁記」の奥書には、

故に信仰の人々。四方に結縁して。一紙又ハ半銭の多少に不限信施の助成を。偏に希もの也。

天保七年丙申四月天女降臨日　　船尾山執事

とあり、この「略縁記」が、奉加帳として作成されたことがうかがえるのである。柳沢寺の存在が確認できるのは比叡山文庫真如蔵の七百科条鈔奥書に「上野州群馬甲挑（ママ）井山小田船尾山柳沢寺東覚院権大僧都法印心俊御所持、文明三年十二月三日、奉書写候」とあるのを初出とすることから、近世の初期には、柳沢寺が、船尾山焼失の伝説を取り込み、縁起化していたと推測できる。

表5　船尾山伝説一覧表

番号	伝承地	内容	資料
1	北群馬郡榛東村大字山子田 柳沢寺境内の思川弁財天	大悲天女の池に身投げした千葉常将の妻を祀るという。	柳沢寺
2	北群馬郡榛東村大字山子田　常将神社	祭神を千葉常将とする。常将の妻によって承暦三年（一〇七九）柳沢寺の堂宇が完成し船尾山の総鎮守として常将が奉祀されたという。	榛東文化
3	北群馬郡榛東村大字広馬場　宮昌寺	昔、千葉左衛門常将が船尾寺に火を放った。この時、東金堂の薬師如来が飛んで、当寺の境内の池に落ちた。そこで堂を建て、真珠山医王教寺と称したという。	榛東文化
4	北群馬郡吉岡町漆原小字上の原 長松寺境内の笊観音	昔、船尾山が兵火で焼けた時、この地で老婆が畑仕事をしていた笊の中に、天から観音様が降ってきたので、以後、大事に祀るようになった。一月一四日は笊観音の縁日で、市も立ち、賑わう。 昔、船尾山が兵火で焼けた時、矢の先に観音をくっつけて東の方に放った。観音は、桑を摘んでいるおんなし（女）の笊の中に入ったので、笊観音と呼ばれるようになった。仲光がしたという印刷物があった。笊を売る市が立つ。	近藤義雄 地名大系 吉岡村誌 富沢豊
5	北群馬郡吉岡町大字北下小字陣場	昔、千葉常将が船尾山の僧兵を攻める際、この地で陣馬を集めたので「陣場」というようになったという。	近藤義雄 地名大系
6	北群馬郡吉岡町大字南下小字釜屋	長和（一〇一二～一七）の頃、千葉常将が愛児相満丸一件で船尾山の寺を攻撃した際に休息をとった兵士のために飯を炊かせたところ。	地名大系
7	北群馬郡吉岡町大字下野田小字大門	最澄が東国巡教の途次、船尾山に楊沢寺を建立した。その時に山門をこの地に建てたので「大門」というようになった。	地名大系
8	北群馬郡吉岡町船尾山船尾滝下 船尾寺跡	昔、船尾寺の僧兵が住んでいた寺の跡だという。	近藤義雄 森田豊 岩田喜嗣 武藤孝夫

9	北群馬郡吉岡町船尾山船尾滝下　硯石	船尾寺跡の傍にある硯石の水は、枯れることがないという。	森田豊
10	群馬郡群馬町大字足門小字寺屋敷	昔、この地に寺があり、船尾寺まで寺が続いていたという。	近藤義雄
11	群馬郡群馬町大字足門小字寺屋敷	昔、船尾山が栄えていた頃、この地にも船尾寺に関係ある寺があり、千葉氏に焼かれてしまった。その後、この寺は高崎市日高町に移って宝門寺となったという。今でも足門の中林氏は宝門寺の檀家になっている。	金古町誌
12	群馬郡群馬町大字足門　八坂神社（足門の天王様）	昔、船尾滝の上に寺があったが、千葉常将は子供の相満が天狗にさらわれたのを寺で隠したと思って焼き払った。この時、常将は欅の木の下で休み、八坂神社に祈った。そこで、当地の人々が八坂神社を祀ったという。	金古町誌
13	群馬郡群馬町大字引間	船尾寺を攻めにいった千葉常将が、僧兵に敗れて兵を引いたところ。	近藤義雄 角川地名
14	群馬郡群馬町大字引間小字花園　妙見寺	千葉常将は、この地で兵を整え、僧兵を破り、船尾寺を焼いたので、船尾寺と当地の妙見寺とは仲が悪い。妙見寺の祭りと柳沢寺の迎え盆とは相反し、妙見寺の七月の祭りが晴天の年は、柳沢寺の迎え盆は雨が降り、妙見寺の祭りが雨の年は、柳沢寺の迎え盆は晴れるという。	近藤義雄

〔資料〕
金古町誌　『金古町誌』（群馬町、昭和三八年）
吉岡村誌　『吉岡村誌』（吉岡村、昭和五五年）
柳沢寺　『群馬の名刹天台宗船尾山等覚院柳澤寺』（群馬県放送センター、昭和五九年一月）
地名大系　『日本歴史地名大系』一〇巻（平凡社、昭和六二年二月）
角川地名　『角川日本地名大辞典』一〇巻（角川書店、昭和六三年七月）
榛東文化　『榛東村の文化財』（榛東村教育委員会、平成元年五月）

次に、④宮昌寺は、柳沢寺と同じ榛東村に所在する曹洞宗寺院であり、「宮昌護国禅寺記」によると、宮昌寺のはじまりは、船尾山焼失の際、船尾寺の薬師如来が飛んで落ちた所に堂宇を建立したことによると記している。

また、妙見社・寺は、「船尾記」の第一類のみに登場する、息災寺の系譜を引くと考えられてきた[8]。⑤大山好弘氏蔵「萩花園星神記」等によると、妙見寺は当初、七星山息災寺と称し、天平二年（七三〇）に建立されたという。しかし、寛治七年（一〇九三）千葉常政が相満若を返さない寺僧に立腹し、船尾山に火を放つ。その時に妙見も類焼し、妙見の尊像は白雲に乗って天上に昇ったという。このように、宮昌寺や妙見社・寺では、船尾山焼失譚が寺社の草創・再興譚と結び付けられている。

ところで、「船尾記」第一類の⑤真塩宇一氏蔵本では、榛名山満行大権現の頭注に「岩屋縁起ニハ満行ハ上野西七郡ノ領主ト有リ」と記

している。この「岩屋縁起」とは、「辛科大明神縁起」とも呼ばれ、『神道集』巻八―四十九話「上野国那波八郎大明神事」と同内容の縁起である。その内容は、群馬太夫満行の息子八郎満胤が死後、大蛇となり、宮内判官宗光によって済度されるというものである。⑤真塩宇一氏蔵本の奥書によると、この「船尾記」は、宝暦九年（一七五九）を原本とし、明治三十九年（一九〇六）に真塩萬之助が転写したものだという。「岩屋縁起」の頭注が宝暦九年（一七五九）の原本にあったかどうかは明らかではないが、少なくとも明治三十九年（一九〇六）に、⑤真塩宇一氏蔵本の「船尾記」を書写した真塩萬之助は、「岩屋縁起」の存在を知っていたといえよう。

この「船尾記」と「岩屋縁起」の両方を巧みに取り込んだのが、⑧内山武氏蔵「上野国群馬郡大嶽山縁起」である。[9] この「大嶽山縁起」では、大蛇となった八郎満胤を藤原朝臣宗光と滝沢寺の貴泊僧正が済度するという説話が記されている。続いて、千葉常将が息子の相満丸の失踪を柳沢寺の座主の仕業と誤解し、柳沢寺を焼き払う。その後、滝沢寺も兵火にあい、焼失したとしている。このように、「大嶽山縁起」は、「岩屋縁起」や「船尾記」を利用し、滝沢寺の貴泊僧正や柳沢寺焼失を介在させることにより、信憑性を持たせた縁起であるといえよう。この滝沢寺は、箕郷町白川に所在する曹洞宗寺院で、古くは天台宗寺院であった。明治二十八年（一八九五）の滝沢寺蔵「滝沢寺調書」によると、当寺は榛名山相馬山連邦の不入山付近に所在した満行山滝沢寺の系譜を引く寺院であり、千葉常胤の怒りをかって焼失したという。

また、船尾山焼失譚を縁起に取り入れないまでも、船尾山焼失譚との関わりを持つ寺社がある。次の寺社は、船尾山焼失譚を草創譚に結び付けている。

① 長松寺（吉岡町漆原。天台宗。延暦寺末）

② 八坂神社（群馬町足門）

①長松寺の本尊の十一面観音は、船尾山焼失の際、船尾山の僧が観音を矢に結んで放ったところ、桑つみをしていた少女の背負っていた笊の中に落ちたことから「笊観音」と呼ばれている。[10] また、②八坂神社は、千葉常将が船尾山を焼き払う際、八坂明神に祈願したことから勧請されたと伝えている。[11] このように、船尾山焼失譚は、船尾山＝柳沢寺とは簡単に割り切れない側面を持っており、柳沢寺に限らず、榛名山の東南麓の寺社が、自らの草創・再興譚に船尾山焼失を取り込んできたのである。

さて、榛名山の外輪山の一つ水沢山東麓に所在する天台宗寺院水沢寺は、四十九代光仁天皇の時に上野国司柏階の大将知降によって水沢寺が焼失させられたとしている。この水沢寺焼失譚は、『神道集』巻七―四十一話「上野国第三宮伊香保大明神事」にも記されている。そして、水沢寺では、以下に掲げた四本の縁起を所蔵しており、水沢寺焼失譚と再興譚とが結びついているのである。[12]

① 水沢寺蔵　題欠（冒頭部欠）（写本一巻。近世中～後期書写）

② 水沢寺蔵「水沢寺之縁起」（写本一巻。宝永七年〔一七一〇〕書写）

③ 水沢寺蔵「坂東拾六番五徳山水沢寺縁起」（写本一巻。昭和三年〔一九二八〕書写）

④ 水沢寺蔵「坂東拾六番五徳山無量寿院水沢寺縁起」（写本一巻。昭和六年〔一九三一〕以降の書写）

このように、榛名山東南麓の寺社では、船尾山焼失譚、あるいは寺院焼失譚を、自らの草創・再興譚と結び付けている。こうした背景には、焼失譚から寺社の歴史がはじまるという歴史認識があるのではないかと考えられる。

以上から、「船尾記」には、柳沢寺という寺院が管理しているものと、柳沢寺の管理外のものとがあることがいえよう。柳沢寺の管理外のものには、本山派の修験であり、白岩山長谷寺観音堂の塔頭の一つ南泉坊が持ち伝えた①浜名寛氏蔵本がある。また、⑧故狩野利房氏蔵本や、⑯内山武氏蔵本のように、渋川市甲波宿弥神社の神官であった

狩野利房氏や、本山派修験であった内山家が所蔵する伝本も存在している。もっとも、この二本は、奥書等がないため、必ずしも所蔵者が書写したとは確認できない。しかしながら、①浜名寛氏蔵本や⑧故狩野利房氏蔵本、⑯内山武氏蔵本の存在は、僧侶や神官、修験者が「船尾記」に関与してきたことを意味している。また、船尾山焼失譚は、榛名山の東南麓に住む人々の間で、現在でも語り伝えられている。

〔表5〕船尾山伝説一覧表によると、前述の宮昌寺、八坂神社、妙見寺という寺社以外にも、千葉常将が軍勢を集めた「陣場」（吉岡町北下）、飯を炊かせた「釜屋」（同町南下）、兵を退かせた「引間」（群馬町引間）等の地名由来が常将や船尾山焼失と結び付けられている。そして、この伝承を裏付けるように、榛名山の外輪山の一つ水沢山の南麓に船尾寺跡が伝存し、船尾寺の焼失が人々の間で記憶され続けているのである。そして、⑦浅見武子氏蔵本のように、「船尾記」は、昭和にはいっても書写されてきたのである。以上から、「船尾記」はある種、地域を知るための資料として人々に求められ、かつ、近・現代になっても享受されてきたと推測できよう。

注

（1）有川美亀男「神道集の説話と船尾山の縁起」（『国語と国文学』昭和三十二年三月号）。有川美亀男「榛名東麓の語りもの文芸」（『榛名と伊香保』上毛新聞社、昭和三十七年十二月）。

（2）福田晃「神道集『群馬八ケ権現事』の形成」（『大谷女子大学紀要』四号、昭和四十五年三月）。のちに『神道集説話の成立』（三弥井書店、昭和五十九年五月）に収録。

（3）松本隆信「中世における本地物の研究」（三）（『斯道文庫論集』一三輯、昭和五十一年七月）。のちに『中世における本地物の研究』（汲古書院、平成八年一月）に収録。

（4）近藤義雄「神道集と船尾山縁起」（『榛東村誌』榛東村、昭和六十三年六月）。

『神道集』巻八―四十七話「上野群馬郡桃井郷上村内八箇権現事」と船尾山焼失譚

（5）福田晃「『神道集』と上州縁起群」（『神道大系月報』七二号、神道大系編纂会、昭和六十三年二月）。

（6）注（4）参照。

（7）『上野志』下巻（『上野志料集成』第一巻、煥乎堂、大正六年九月）一四九頁。『上毛国風土記』第七群馬郡（『上野志料集成』第一巻、煥乎堂、大正六年九月）二九九頁。

（8）安永三年（一七七四）序の『上毛伝説雑記』巻之八「上野伝説」上には、「千葉介胤正の嫡子相満君胤政を船尾山にて見失ひ、法師と一戦の節、三千の坊舎・六千の在家、一時に煙雲広野となる。其時、雲中より相満君見え給ふを以て、相満嶽といふ。其後、常陸・上総等へ引移られ、息災寺の妙見を建立あり。」（『上野志料集成』二巻、煥乎堂、大正六年十一月二十三日、一六六頁）と記されている。また、明治十四年（一八八一）頃に編纂された『上野国郡村誌』巻十五「上野田村」の「柳沢寺廃趾」条には、「船尾山東南ノ麓ニアリ、今ニ堂ノ入ト称ス、蓋伝教大師創立ノ時ハ該地ニ楊沢寺ヲ建テシヨリ以前ニ在リ、此寺旧時ハ妙見山息災寺ト号シ、今本郡引間村ニ在ル妙見寺ノ濫觴ナリト柳沢寺縁起ニ見ユ、該寺ノ鐘銘ニ僧最澄宝亀七年草創之トアリ（中略）長和ノ頃千葉介常将其子相満丸ヲ寺僧ノ匿シテ帰サヾルヲ疑ヒ一山ヲ焼討シ衆僧ヲ屠殺ス、常将既ニシテ之ヲ悔ヒ屠リテ死ス、其妻之ヲ悲ミ其側近堂ガ入ニ楊沢寺ヲ建ツ、後又之ヲ山子田村ニ移シ柳沢寺ヲ創ムト、其他口碑遺説ハ山子田村柳沢寺ノ条ニ記載シ後考ニ備フ」（『上野国郡村誌』六巻、群馬県文化事業振興会、昭和五十六年三月、二四四・五頁）と記されている。

（9）内山武氏蔵「上野国群馬郡大嶽山縁起」については、拙稿「『上野国群馬郡大嶽山縁起』と『神道集』関連の在地縁起資料」（『西郊民俗』一九三号、西郊民俗談話会、平成十七年十二月）を参照。

（10）明治十四年（一八八一）頃に編纂された『上野国郡村誌』巻一五「漆原村」の「長松寺」条には、「観音堂（中略）本村長松寺ニテ管ス、伝ヘ言フ、千葉左衛門常将ノ護持仏ニシテ曽テ船尾山ニ在リシヲ、後本村ニ移セシト云伝フル舟尾十三仏ノ一ナリ」（『上野国郡村誌』六巻、群馬県文化事業振興会、昭和五十六年三月、二五二頁）と記されている。

（11）『上野国郡村誌』巻一三「足門村」の「八坂神社」の条には、「村伝ニ

長元四年千葉介常将本国舟尾山寺ヲ焼滅セントテ、此処ニテ八坂大神ヲ祈念シ遂ニ戦テ僧兵ヲ鏖セシカバ、里人其跡ニ社ヲ建テ崇敬セシヨリ創ルト、按ニ応仁武鑑ニ長元四年ハ常将ノ父上総介忠常誅セラレ常将二歳母ト共ニ常陸ニ遁ルトアリ、然レバ長元ハ恐クハ誤リナラン、今考フベキナシ」（『上野国郡村誌』六巻、群馬県文化事業振興会、昭和五十六年三月、一四八・九頁）と記されている。

（12）水沢寺縁起については、福田晃「『神道集』と上州縁起群」（『神道大系月報』七二号、神道大系編纂会、昭和六十三年二月）、大島由紀夫『水澤寺縁起』翻刻・解題――『神道集』関連の在地縁起（一）――」（『群馬高専レビュー』一三号、群馬工業高等専門学校、平成七年二月）、大島由紀夫『神道縁起物語』二（三弥井書店、平成十四年三月）を参照。なお、大島由紀夫『神道縁起物語』二には、本稿で取り上げた「船尾記」三本も翻刻・影印されている。

付記

本稿をなすにあたり、群馬県立文書館、群馬郡群馬町のかみつけの里博物館、榛名町歴史民俗資料館の諸機関には、様々な御高配を頂戴しました。また、柳沢寺住職小川晃勝師、水沢寺住職山本玄晃師、滝沢寺住職秋月保教師、近藤義雄氏、浜名寛氏、森田豊氏、森田秋氏、大山好弘氏、真塩宇一氏、武藤孝夫氏、岩田喜嗣氏、富沢豊氏、内山武氏、松田直弘氏、住谷修氏、清水喜臣氏、清水作太郎氏には、貴重な資料を拝見させていただく機会を与えてくださいました。ここに記して、厚く御礼申し上げます。